

北九州が生んだ先人・安川一族 近代社会・人を育む



戸畑区にある西日本工業倶楽部（旧松本邸）。敬一郎の「財は私すべきではない」との遺訓に沿って、孫の安川寛が伯父・松本健次郎邸を北九州の経済団体活動の場にした。

明治以降、現代まで北九州は数多い文人、技術者、思想家、教育者等を産み育て、社会の発展に貢献し今もなお進捗続けている。今回はその中でも、炭鉱・石炭業を手始めに、電機関係、日中をはじめ国際友好などに一族挙げて取り組んできた安川一族を紹介したい。地元北九州はもとより社会の発展に貢献し、今なお活躍するその姿は北九州の誇りでもあろう。

明治42年（1905）4月、私費で九州工業大学の前身の私立明治専門学校（略称・明専）を設立した。その背景には炭鉱等で得た巨額の資産について「国家興隆のもとは、まず人材養成。財は天下公共のもの。之を私すべからず」との信念があった。後年、衆議院議員、男爵にもなつて貴族院議員も経験、昭和9年（1934）、86歳で他界したが、中国から日本に亡命していた孫文との親交、援助も厚かった。その関係は孫の安川寛にも引き継がれ日中友好の道を太くした。

創業者敬一郎「財は公共のもの 私すべからず」の信念

その契機は幕末・福岡藩士の4男として出生した安川敬一郎（1849～1934）である。幼年期から漢学を学び、藩費学生として京都、静岡に留学。勝海舟とも会つて洋学を勧められ明治期、慶應義塾に入学した。帰郷後、兄・松本潜とともに家業の炭鉱事業に従事。明治22年（1885）の筑豊石炭鉱業組合設立に尽力し本店を若松に、大阪と門司に支店を開設した。

安川一族挙げて社会に 人に貢献

敬一郎には5人の男児がいた。2人は早世などし、次男健次郎は父敬一郎の兄・松本潜の養子になり松本健次郎として石炭販売網拡充に尽力。三男清三郎は大正8年（1919）株式会社安川電機製作所設立時の社長を務め、彼の子が安川寛（ひろし）。昭和11年（1936）父・清三郎の死で安川電機取締役就任し、以後、

郷土史家轟良子さんは、その著「海峡の風 北九州を彩った先人たち」で「国家興隆のもとにはまず人材養成と考えた敬一郎、松本健次郎の信念は、今の世にも通じる。財は天下公共のもの。之を私すべからず、と言つた明専建学の精神は、現代にこそ語り継がれる意味がある」と記し、彼等の精神、生き方に感銘を受けたと話している。

41年間にわたつて同社社長、会長を務めたほか、7期21年にわたつて北九州商工会議所会頭を、また九州陸上競技協会会長、ブラジル名誉領事を務めるなどした。彼も少年時代、孫文と並んで写つた写真を持ち、訪中の際、大連市長に頼まれて譲つたエピソードがある。

5男が第五郎。大正4年（1915）、安川電機が合資会社安川電機製作所として八幡・黒崎でスタートした時、代表社員として参画。同8年に株式会社として合資会社を吸収合併時には兄清三郎が社長、第五郎は常務として機械製造部門を担当し、兄の死で社長となった。会社は

大正4年の創設時から昭和7年までの実に17年間、赤字

続きだった。その間、人員整理、減資などの苦境にあえぎながらもモーターなど電動機の製造を中心にした事業を展開。敗戦によって一度は大打撃をこうむつたものの、日本経済の発展に伴う電動機需要の高まりで業績が拡大、工場も八幡だけでなく行橋、小倉、さ

らには関東に増設するなどした。第五郎は頼まれると断れない性格といわれた。頼まれるのはいずれも苦しく、間尺に合わないものが多い。一例として戦前は電機統制会会長、敗戦直後の石炭庁長官。その後の追放解除後には日銀政策委員、九州電力会長など限らないほどである。それらの中で特に引き付けられるのは原子力関係。昭和31年（1956）、日本原子力研究所理事長に、翌32年には初代の原子力発電会社社長に任じられた。国民一般に最も身近に思えたのは、昭和39年（1964）の東京オリンピック。第五郎は組織委員会会長職を任じられ、それまで幹部のトラブル続きで開催が危ぶまれていた東京五輪を大成功に導いた。

これら安川一族が果たした成果、その原点とも言える安川敬一郎らの信念について、

シニアスタッフ 村田和夫



安川敬一郎

ついに完成 創刊10周年記念

北九州 歴史文化遺産

北九州の知られざる史実を
独自取材で記した
記事の集大成です。
ぜひお手にとってご覧下さい。



- ◆発行 一般社団法人 北九州シニア応援団
- ◆執筆 村田和夫 ◆A4サイズ87ページ
- ◆価格 1,500円(税込)

読めばこの町が
もっと好きになる!



ご購入・お問い合わせ
さくら編集部
TEL 093-965-6080